

研修医通信 Vol.106

1ヶ月間、紀南病院で地域医療研修をさせていただきました。紀南病院を訪れた最初の瞬間から、指導医やその他先生方の気さくで穏やかな様子や、研修担当の方、医療安全・感染管理部の方の優しさに触れることができました。研修を通じて、地域医療特有の問題（全ての科が揃っていない、1分を争う様な疾患の診断・治療やその際の患者の輸送方法など）が歯痒いと思う反面、いい意味でその点を妥協しながら、慣れ親しんだ地域で最後まで過ごしたいといった患者本人や家族の希望に沿う医療は、自分にとって色々と考えさせられるものがありました。病気を診るのではなく人を診る、地域を診る、ということを通して学びたいと私たちは最初のオリエンテーションで言われました。しかし自分は、そうは言われても救急対応や内科病棟管理すら満足にできないし…と内心思いながら毎日過ごしていました。ただいざ1ヶ月を終えてみれば、入院した患者さんが今後どうやって生活を続けていくか、本人と家族の思いはどうか、そのために使える地域の医療介護支援は何か、チームで一生懸命考えて研修医の自分にも意見など聞いてくださるコメディカルの人たちがいました。今後自分がどの病院で勤務することになってもこの経験を必ず生かして生きたと思います。最後ですが、ご指導いただきました谷口先生はじめお世話になった皆様、本当にありがとうございました。

鈴鹿回生病院 初期研修医2年目 石川 ひづき



この一カ月は私にとって驚きの連続でした。東紀州と呼ばれるこの地域ではコンビニは気軽に自転車で行ける距離にはなく、電車は1時間に1本あるかないかです。こんな場所でも人が暮らしているのだな、と驚愕しました。終電は22時と早いにもかかわらず、その時間になると既に町に灯りが無くあたりは真っ暗で、星座がくっきりと見えてきれいだったことが印象的です。

ふるさと訪問や診療所研修を経て驚嘆は加速すると同時に、徐々に納得へと変化していきました。北山村や神川といった中山間地域ではかつては林業やダム建設で複数の会社が入り人も多く、今では考えられないほど栄えていたそうです。ダム建設が終了し林業も衰退すると人々は職を求めて離れていき、高齢者ばかりが残されたようでした。地域の産業や歴史を知りどのように発展して衰退していったのか話を伺うと、住民にはその地域で今まで生活してきた歴史があるため離れるなどという考えは微塵もないのだと理解できました。そんな地域に住まう高齢の方々が必要とするのはやはり医療なのだろうとしみじみと感じました。

病院内で病棟管理や救急外来を通して、地域住民のキャラクターや医療体制を学び、ふるさと訪問や診療所研修、名物の居酒屋”よっちゃん”などを通して人々の生活背景を知ることができました。地域をマクロとミクロの両方の視点で考える貴重な機会を下さり、本当にありがとうございました。

伊勢赤十字病院 初期研修医2年目 小林 侑生

